

よき友はものくるる友草紅葉

田中裕明（『先生から手紙』）

掲句は、吉田兼好著『徒然草』の有名な一節から採られている。「よき友、三つあり。一つには、物くるる友。二つには医師（くすし）。三つには智恵ある友」。

裕明作品には、他の文献から引用のように、本歌取りのように採られているフレーズは他にもあって、たとえば、

別に子細なき信心の櫻貝（『花間一壺』）

などがある。こちらは『歎異抄』。「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべすと、よきひと（法然）の仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細(しさい)なきなり。

念仏は、まことに浄土に生まるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん。総じてもつて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ」。

いずれも本を読んで心うごかされた箇所を核に一句に成したのだろう。こういう句の場合、季語が一句の生命だ。どちらも作者のあたたかな歩み寄りを感じさせる。「草紅葉」は作者の茶目っ気や含羞を感じさせ、「櫻貝」は実に可憐だ。いずれも、裕明の美意識や詩的直観によって選び抜かれた季語だろう。